

## 説教「生涯のささげもの」コリントの信徒への手紙二 8：1－15 2017年7月2日

今日のテーマは「ささげもの」、献金です。信仰と献金の問題について考えたいと思います。お金の問題、これは信仰とは別個の問題ではなく、密接に関係した問題として聖書は扱っています。今日の聖句で特に重要と思われる箇所は二つあります。一つは2節、ここに「極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなった」とあります。貧しさがあふれ出るなどということがあるのでしょうか。人に与えてしまうことで豊かになるということがあるのでしょうか。もう一つは9節です。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためだった」。ここではキリストの十字架の死が、私たちに豊かな命を与えることになったと言っています。

貧しさがあふれ出る。死が命となる。この矛盾。この逆説が意味していることは、「無からの創造」ということです。創世記1章に神は無から世界を創造されたとあります。この「無」は「混沌」と訳されています。つまり「無」は単なる物理的な真空を意味しているのではなく、ヘドロのような状態、人間の罪と死を表しています。つまり「無からの創造」とは、神様が人間を罪と死から贖いだし、義と新しい命を与えてくださるということです。ここで、貧しさがあふれ出し、キリストの死が私たちの命となると言われていることは、私たちが無からの創造に参加させられているということです。もっといえば、教会の会計をやるということは、無からの創造に参加するということです。これが世間一般の会計とは違う、教会会計の基本的なあり方です。

教会の会計を扱った **Effective Church Budget** (効果的な教会予算：教会のリーダーのための献金の集め方と予算の作り方) という本があります。教会会計は世間一般の会計と同じように考えてはならない。そこには独特な考え方がなければならないというのです。そこで使われている言葉に「ミッション・バジェット」というのがあります。ミッションナリーと言えば宣教師のことですから、ミッションは宣教と訳してかまわないでしょう。そしてバジェットは予算です。つまりミッション・バジェットとは宣教予算ということです。このミッション・バジェットということでは、宣教というものは、まず宣教目標があって、それから予算化が行われるという考え方です。ともすると、まず予算の枠があって、その範囲内で宣教計画を立てるとするのは、懸命なようでも信仰的ではないということです。「初めにお金ありき」ではだめなのです。「はじめに言葉あり」つまり神様が与えてくださる使命（ミッション）がある、それに基づいてお金はいくら必要かを考えるということです。それはまさに、神様の無からの創造に参加するということに他なりません。

無からのスタートです。無、つまり貧しさ。これを抱えるというところから教会の予算化が始まります。ところで、貧しさを抱えるということで最近考えさせられていることがあります。まきばフリースクールで立ち上げた就労支援事業の利用者さんたちは、その大

部分が知的障害者で生活保護を受給しています。この方々の悩みを聞いておると、ほとんど全員、一番に挙げる悩みはお金がないことです。けれども実際はあるのです。生活保護というのは、衣食住だけでなく医療費や教育費もまかなってくれますし、おむつ代、メガネ代、NHK受信料、仕事に就くための費用、その他にもただで受けられるサービスが結構あります。最低限といっても困らない程度には十分もらえるのです。国や県が面倒見ているのだから大丈夫ですよと言って聞かせても、それでもお金が足りないというのはなぜでしょうか。そこには実際のお金の不足よりも、メンタルな問題があるようです。つまり欠乏感と不安感です。いつもこの欠乏感と不安感にさいなまれているので、それを紛らわすためについ余計なものを衝動買いしてしまい、ひどい場合は、お金をもらってその日のうちに使い果たしてしまうのです。悪循環ですね。この人たちは何のためにお金を使っているのか？それは生活のためではありません。欠乏感・不安感をなくすためにお金を使っているのです。このメンタルな仕組みはお金持ちにも当てはまります。お金がたくさんある人ほど、お金がなくなる不安感が強くあると言われています。だから始終もっともっともお金儲けに人生を費やすのです。欠乏感・不安感、これは貧しい者も富める者も、中間層も、私たちの誰もが一様に陥っている病気なのです。

わたしも60歳になり、だんだん「死」というものを考えるようになりました。ときどき、「もう死んでもいいかな」と思うのです。生き残って自分を生かすこと、自己実現に魅力を感じなくなってきました。けれどもまだまだ元気ですし、与えられた賜物のことも考えます。これからの人生をどう生きるか。お金も含めて持てる才能や資源をどう使うかが課題です。もう一度、9節を読んでみましょう。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためだったのです。」これは先に申し上げましたように、イエス様が私たちを罪と死から贖いだし、新しい義なる命を与えてくださったということです。この恵みがあるということは、私たちはもはや自分で自分を生かすことを考えなくてもよくなったということです。自己実現はもう考えなくていい。自分のことは神様が面倒を見てくださるということです。では残された力をどう使おうか。誰のために使おうか。自分のために使わなくていいのですから、誰のために使おうか。

これとの関連でもう一か所、聖書を開いてみましょう。ローマの信徒への手紙12章6節です。「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っています」。賜物というのは、お金や財産も含む様々の才能や資源のことです。ここでパウロは、預言の賜物、奉仕の賜物、教える人、勧める人、施しをする人、指導する人、慈善を行う人と述べています。人にはそれぞれ様々の才能がありそれを伸ばしていくことが若い人には求められますが、結局それらを自己実現のために使うだけだとするならば、これほど虚しいことはないのではないのでしょうか。「だからなんなんだ？こんなに苦しい思いをするのだったら、もう死んだ方がいい。」という考えに陥っていくことを防ぐことはできません。ここで大切な言葉は、「与えられた恵みによって」という言葉です。イエス様の十字架によって、

私たちが持っている才能や資源はその意味を変えます。十字架で新しい義なる命をいただいた私たちは、私たちの才能や資源をも新しく受け取るのです。それは自分のためのものではない。他者のためのものです。私たちのこの目は、自分のためのものではなく、目の見えない人のためのもの。歩ける足は、自分のためではなく、歩けない人のためのもの。そしてお金もそうなるのです。

先ほど教会の予算、ミッション・バジェットは無からのスタートだと話しました。まず自分が無であることから始める。繰り返しそこから始める。無というのは混沌、ヘドロ、罪であり死、苦しみです。自分の不安感・欠乏感、これです。これをなくそうとすることから、際限のない欠乏感の悪循環に陥っていきます。わたしたちはこのヘドロのような不安と欠乏感に、自分で片をつけようとしません。ただ神様の前に差し出すのです。十字架の御許に差し出すのです。この時キリストはこのヘドロをご自分の事として、私たちから取り上げてくださいます。悪循環が断ち切られます。そして、私たちのわずかながら残る賜物、才能や資源に新しい意味が与えられます。それは他者のため。私たちの教会の予算は極めて貧しく不安の種ですが、それでもこれを誰のために使いましょうか。地域には、少子化で子育てが困難な親たちがいます、貧困家庭があり、障害児やボーダーラインの子どもを抱えた親たちがいます。孤独と不安と不満を抱えた高齢者がいます。さらには原発で傷ついた人々がいます。

貧しさがあふれ出て豊かさとなる。無からの創造。私たちの教会がこの奇跡に参加させていただけるように祈りましょう。